会　議　要　録

名　　称	第３回豊橋市ごみ減量推進検討委員会
日　　時	令和元年１０月２４日（木）　午後２時００分から午後４時００分まで
場　　所	豊橋市役所 東館１２階 １２３会議室
出席委員	稲田充男委員、山田剛史委員、川本恭久委員、長崎正敏委員、 稲垣ローザ委員、古地英明委員、夏目美鈴委員、鈴木真理子委員、 鈴木幸宏委員、長坂英樹委員
欠席委員	なし
環境部職員	環境政策課長 小林正彦、廃棄物対策課長 佐藤実、 収集業務課長 若子尚弘、資源化センター　センター長補佐 三木和敏、 施設建設室　主幹 稲垣直樹、埋立処理課長 田邊章裕 環境政策課 　課長補佐 井上知之、資源循環グループ主査 三木寅男、担当 森敬広
内　　容	１．　議題 ２．　その他

議題の概要

議題１　リサイクルの推進について

議題２　家庭系ごみの有料化について

議題３　ごみ処理における全国的な課題について

第３回豊橋市ごみ減量推進検討委員会会議録

日　時：令和元年１０月２４日（木）　１４：００～１６：００

場　所：豊橋市役所 東館１２階 １２３会議室

司会：環境政策課長

○　あいさつ（委員長）

≪議　事≫

事 務 局：議題１「リサイクルの推進について」説明（環境政策課長補佐）

委　　員：市民アンケートの分析に「５割の人が、『どのようなものが古紙としてリサイクルできるかわかれば分別する』と回答した」とある。これがまさに市民の実感だと感じる。

市民に、「どのようなものが古紙で、どのように出せばよいか」ということが浸透すれば、古紙のリサイクルが進むと考える。古紙の出し方を、どのように啓発しているか。

事 務 局：古紙の出し方は、新聞、段ボールのように性状が同じものと、雑がみのように性状がバラバラなものとで線引きがある。「性状が同じ新聞、段ボールはそれぞれでまとめて地域資源回収などに出す」とし、「性状がバラバラな雑がみは、同じく性状がバラバラな雑誌とまとめて地域資源回収などに出す」としている。

委　　員：新聞や雑誌のように出し方がはっきり分かるものは市民も出し易い。

雑がみの出し方が分からず、資源に出し難いと感じる市民が多いというのが、実情と感じる。出し方をはっきりと啓発する必要がある。

委　　員：雑がみの啓発チラシにコピー用紙のイラストが載っていないことがあった。学校のプリントなど、コピー用紙を出したい家庭は多い。
コピー用紙のイラストはチラシに毎回掲載して啓発に取り組むと良い。

委　　員：日常生活から出やすいものはなにか、どのようなことに困っているかなど、市民のニーズを意識して啓発チラシのデザインに取り組むと良い。

委　　員：体験を通じた啓発にある、訪問講座や出前講座について、講座の内容はどのようなものか。

事務局：子ども向けの講座は、保育士経験者による劇調の分別体験や環境映像の視聴、市の職員による分別やごみのゆくえの説明、クイズなど、楽しみながらごみのことを学ぶことができるような内容である。
大人向けの講座は市の職員によるごみの現状や、分別ルール、ごみ処理方法を説明する内容である。

委　　員：受講者の反応はどうか。

事務局：良好である。

委　　員：ごみの分別を漫画で伝えるポスターが保育園の壁に掲示されていた。小さいころから親しみ、自然に取り組むことが大切と感じる。漫画で分かりやすく伝えるポスターの作成、配布に取り組むと良い。

委　　員：前回委員会で視聴した環境映像は大人でも十分楽しめる内容であった。今後も積極的に活用すると良い。

委　　員：幼児、小学生、中学生と切れ目なく、ごみに対する意識付けを継続できるような啓発活動に取り組むと良い。

委　　員：市内にブラジル人学校が２校あるが、そちらへ出前講座に出向くことは有るか。

事 務 局：無い。自治会からの依頼を受け、外国人を対象にした出前講座を実施したことは有る。通訳同行のうえ、ごみのルールについて説明した。

委　　員：豊橋市民の５％は外国籍でその半分は南米出身である。南米出身の人でブラジル人学校に通っている人は多い。ブラジル人学校に出向いて、出前講座に取り組むと良い。

事 務 局：依頼があれば伺いたい。一方で通訳の手配に課題がある。

委　　員：日本語の授業があるので、その時間を利用すると良い。

委　　員：通訳を手配してしっかりと取り組むと良い。

委　　員：古紙のリサイクルの推進に向けた啓発については、古紙としてリサイクルできるものはなにかという「古紙の定義」、どのように出せばよいかという「出し方」に焦点をあてた啓発に取り組むと良い。

委　　員：スーパーやホームセンターにある古紙回収コンテナのような、民間の古紙回収拠点が市内に 21 か所あることを初めて知った。古紙の回収場所が分からない、又は、持ち出せない人への配慮が足りないと感じる。
１か月や２か月に１回、雑がみだけでも、ごみステーションで回収すると良い。行政が回収すれば、行政に負担は有るが、自治会に負担は無い。
地域資源回収と、ごみステーションでの行政回収を併用した古紙の持ち出し機会の拡充に取り組むと良い。

事 務 局：地域資源回収の活性化など、地域の取り組みを支援する方法での拡充に取り組みたい。

委　　員：市民の「分別が分からない、近くに出す場所が無く出しづらい、頻度が少なくて溜まる、だから近くのごみステーションにごみとして出す」という気持ちは理解できる。
自身に置き換えても、体が思うように動かなければ、もやすごみとしてごみステーションに出してしまうこともあるかもしれない。

委　　員：地域資源回収を後押しし、行政回収が補完する形が望ましい。

委　　員：ごみ処理経費が増加しても、「５３０のまち　とよはし」として、行政回収に取り組むべきと考える。

委　　員：委員会の「ごみステーションを利用した古紙の行政回収に取り組むと良い」とする意見に対して、市に検討の余地は有るか。
地域資源回収を拡充しても、古紙のリサイクルが進まなかったときに検討するという考えか。

事 務 局：地域資源回収の活性化や、古紙回収拠点の広報強化など、今ある仕組みを後押しする形での、拡充に向けた取り組みが第一と認識している。

委　　員：１つの団体が地域資源回収を毎月実施することは難しい。PTA や老人会など、複数の団体が実施時期をずらし、結果的に毎月地域資源回収があるという形が望ましい。

委　　員：地域の自助努力や民間の営利活動を活性化する取り組みだけでなく、行政自らが行動する施策にも取り組むと良い。

委　　員：自治会未加入者のような、地域資源回収の情報が伝わらない層に対する具体的な取り組みは有るか。

事 務 局：ホームページや、ごみ分別促進アプリ「さんあ～る」を通じて情報を公開している。

委　　員：アプリのチラシを見たときに、チラシのキャラクターの名前が「さんあ～る」であるかのような印象を受けた。チラシをひとめ見ただけではアプリの機能を想像できない。「電子版ごみガイドブック」といったように、ひとめでアプリの機能が分かるチラシの作成に取り組むと良い。

事 務 局：1 万数千人が利用している。地域資源回収実施日の確認や、地図上での資源回収拠点検索など、ごみガイドブックよりも多機能化している。

委　　員：アプリを利用して利便性が非常に高いと感じた。利用拡大に向けて積極的に取り組むと良い。

委　　員：アプリとホームページに、情報の量や質の違いは有るか。

事 務 局：資源回収拠点の、地図上での位置確認など、一部違いがある。

委　　員：全ての市民が同じ知識を取得できることを意識し、若年層、中高年層など、世代間の違いを踏まえた情報提供に取り組むと良い。

委　　員：生ごみ分別により得られる効果や、分別しないことで生まれる不利益に関する情報を加えて啓発に取り組むと良い。

委　　員：もやすごみに混ざったびんが原因で作業員がけがをしたというフェイスブックの写真付き記事を見て、分別徹底への強いメッセージを感じた。ただお願いする啓発ではなく、なぜ必要なのかを明確にした啓発に取り組むと良い。

委　　員：フェイスブックやツイッターのような、SNS を通じた情報発信に取り組むと良い。

委　　員：市民が現状や分別する理由を理解し、行動しようと感じるような啓発を意識すると良い。

委　　員：事業系生ごみはバイオマス利活用センターの稼働に伴って分別するようになったという解釈で良いか。

事 務 局：良い。事業系生ごみもバイオマス利活用センターでリサイクルするために、排出事業者と廃棄物処理事業者に協力を求めている。

委　　員：事業系生ごみの分別が始まった当初は、小規模事業者ほど消極的であったが、経済的インセンティブへの理解が進むことで浸透した。
排出事業者側の事業主が自らの若手従業員を教育し、その若手従業員がマニュアルを作ることで浸透した。現在は、事業系生ごみの分別を豊橋市のルールと位置付けて、新規事業者に案内している。
分別の必要性が排出事業者に伝わるような啓発に取り組むと良い。

委　　員：事業系可燃ごみからの古紙のリサイクルを第一に、事業者への働きかけに取り組むと良い。

事 務 局：議題２「家庭系ごみの有料化について」説明（環境政策課長補佐）

委　　員：ごみ袋の更なる値上げには賛同できない。

事 務 局：本市が平成 28 年度に導入した指定ごみ袋制度は、市が定めた規格の袋を使ってごみを出す制度で、価格にごみ処理費用を含まず、市民はごみ処理経費を直接負担しない。
有料化制度は、例えば、価格にごみ処理経費を含んだ袋を使ってごみを出すというように、市民がごみ処理経費を直接負担する制度である。
指定ごみ袋と有料化は異なる制度だが、市民目線で見ると、有料化の方法にもよるが、袋の値上がりと映る可能性があると認識している。

委　　員：ごみの量が増え、処理しきれないという事態になれば、家庭系ごみの有料化もやむを得ない。

そうならないように、市民はごみの分別、リサイクルに取り組む必要があり、また、市は市民の理解と取り組みが進むように十分な情報提供に努める必要がある。

ごみの減量やリサイクルを後押しするような施策に、市が多角的に取り組むことを期待する。

委　　員：資料にある「有料化していないごみに、有料化したごみが混入し、分別が乱れる可能性がある」とあるが、これはどのような状況か。

事務局：例えば、もやすごみだけを有料化したとして、有料化していない生ごみやこわすごみの中に、もやすごみが隠れて混ぜ込まれる状況のこと。

委　　員：既に有料化している自治体がそのような状態にあるということか。

事務局：あくまでも可能性の一つとして挙げた想定である。調査では「不法投棄は増えていない」とする自治体が多かった。

ただし、有料化していないごみに有料化したごみが混ざる事案が増えたかといったように、詳細な条件付けはしていない。

委　　員：この想定のような、一般に想像される不法投棄とは言いがたい事案に対して、罰則を科す条例を設けると良い。

事務局：ごみの持ち出しに関して、罰則規定を設けた条例を制定している自治体は無いのではないかと思われる。

委　　員：有料化しないに越したことはないが、ごみに対する意識付けや、社会全体の情勢を鑑みると、有料化の導入はやむを得ない。

委　　員：ごみの減量や分別に一生懸命取り組んでいる人とそうでない人がごみ処理経費を一律に負担する現状は公平と言えない。費用負担の公平性の観点からも有料化はやむを得ないと考える。

ごみ処理経費の一部を直接負担した分は、福祉や教育に回せるとすれば、市民の理解も得られやすいと考える。

委　　員：有料化するのであれば、ごみステーションで古紙を行政収集するというように、ごみの減量やリサイクルを後押しするような市の率先した取り組みが不可欠である。

現状のまま有料化では、雑がみを野焼きして経済的負担を減らすという考えに繋がりかねない。

委　　員：家庭系ごみ有料化の導入は、いずれ避けられないものであるという認識のもと、ごみの減量とリサイクルの促進に向けた市と市民の双方の努力を踏まえ、メリット、デメリットを慎重に比較する中で、可能な限り導入を先延ばす形で検討すると良い。

事 務 局：議題３「ごみ処理における全国的な課題について」説明（環境政策課長補佐）

委　　員：福祉の現場の意見として、ふれあい収集はとても良い取り組みで、非常に感謝している。一方で、福祉の現場と収集の現場との情報共有が進めば、さらなる発展につながると考える。

今後の高齢化社会の進展を見据え、福祉と収集との双方が密に連携できる仕組みづくりに取り組むと良い。

委　　員：どのように取り組みを広報しているのか。

事 務 局：ケアマネジャーや民生委員を中心に広報している。

委　　員：老人会を通じた広報に取り組むと良い。

事 務 局：地域住民による支援など、地域の助けあいの輪を壊さないように配慮しつつ、利用を呼びかけ、現在、約 450 世帯の方が利用している。

委　　員：地域の助けあいの中で完結することが最良である。

委　　員：豊橋市の指定ごみ袋にバイオプラスチックを取り入れる考えはあるか。

事 務 局：プラスチックを取り巻く情勢は、ここ数年で大きく変化しており、製造コストや製造事業者など、全国的な動きも含めて注視している。
使い捨てプラスチックの利用抑制に向けた啓発活動に取り組んでいる。

委　　員：バイオプラスチックを使った指定袋でごみを出すという行動そのものが環境への配慮を意識づける啓発につながると考える。
今後の動きを見据えて積極的に取り組むと良い。

委　　員：バイオプラスチックの導入による値上がりは許容できる。
環境に配慮した取り組みの導入を理由とした家庭系ごみ有料化の導入は市民の理解も得られやすいと考える。

委　　員：横浜市は行政が配布するボランティア袋に導入している。バイオプラスチックを含む袋は価格が高く、家庭向けへの導入は市民負担が大きい。

委　　員：５３０運動用ごみ袋へのバイオプラスチック導入に取り組むと良い。

委　　員：プラ５３０宣言の主管団体と、取り組み状況はどうか。

事 務 局：豊橋市と５３０運動環境協議会の共同宣言で、環境部が主管する。使い捨てプラスチックの利用抑制に向けて、今後、取り組みを広げたい。

委　　員：ごみ処理における全国的な課題については、現在の取り組みを益々発展させると良い。

委　　員：他の自治体の成功例を豊橋市に取り入れると良い。

委　　員：ごみステーションの管理に取り組むボランティアが年々減少している。ごみステーションの管理に、精力的に取り組む個人や団体、若しくは、模範となる清潔なごみステーションを表彰する制度に取り組むと良い。表彰制度により市民意識の高揚を図ることで、ボランティアが増えると考える。

事 務 局：地域功労者の表彰制度などを利用しながら取り組みたい。

委　　員：ごみの減量とリサイクルの推進に向けては、市民のニーズや世代毎の特徴を意識した啓発に尽きる。これを第一とした、積極的な啓発への取り組みが、ごみの減量とリサイクルの推進に向けた提言の第一歩である。

○　その他

特になし。